

十神山



会報 安来節

YASU GI BUSHI

発行所 安来節保存会

〒692-0064
島根県安来市古川町534
TEL 0854-28-9988
FAX 0854-28-9393
http://www.y-hozon.com/
E-mail:admin@y-hozon.com

新名人に聞く



唄名人
出雲正之助
(益田支部)

私が安来節に身を投じるきっかけになったのは、山陰中央テレビ放送局開局番組の「民謡ここの一番」という民謡番組があり、当時の益田支部長の波佐本静摩さんに連れられて出演した時に審査員としておられた故唄名人二代目出雲愛之助師匠の目に留めていただき、内弟子として修行に入ることとなりました。内弟子として道場に入る日は、両親と叔父が同伴し、波佐本さんの車で向かいました。すでに弟子入りの儀式も用意が整っており、先輩弟子をはじめ師匠の係わり合いの深い方たちも集まっておられました。式も滞りなく終わり、弟子としての役割が始まりました。

まずは儀式の後の新弟子披露宴会の給仕からで、給仕などの経験が全くない私は何となく恥ずかしさが先に立ち緊張が高まり、体が力チコチになってしまいました。最初に習い始めたのは、三代目出雲愛之助兄弟弟子の指導で銭太鼓・どじょうすくい・鼓でした。まず自分に課せられた事は、稽古を積み重ね、一日も早く舞台に立つ事でした。それには師匠をはじめ先輩の芸をしっかりと感じ取る事も大切

な事と思い、芸事に専念しました。当時は竣工式、敬老会、納涼会等や夜には旅館での観光客への演奏とかなりの仕事があり、たくさんの舞台を踏ませていただき、舞台を知ることとなりました。そのうち皆生温泉の皆生ヘルスランドから常付けの出演依頼があり、勤める事になり、昼は皆生で夜は玉造温泉旅館での演奏という生活をしておりました。師匠の言葉の中に「芸は見て取る事が最も大切である」との事で師匠と演奏に行く道中の車内では大きな声を張り上げて安来節、またアンコ入りの唄を唄って師匠に指導を受け、ほとんどの唄を覚えられました。今思うと修行は芸人として生きて行く為人づくりではなかったかとも思います。修行をする事によって芸は自ずと身について来るものだと思っております。これからも先ず自分を正しく見つめて風格ある芸を目指したいと思えます。

プロフィール

- ◆生年月日 昭和二十三年七月二日（六十八歳）
- ◆保存会役職 資格審査員
- ◆入会年月日 昭和四十五年四月入会
- ◆活動記録
 - 現在 山陰中央新報社文化センター民謡講師
 - 「松江城山祭り」毎年出演
 - 安来節演芸館多数出演
 - 昭和五十三年 「全国民謡民舞春季大会」優勝
 - 昭和五十三年 フラジール・サンパウロ、モジダスクール・ゼス、ロンドリーナ三都市にて日本移民七十周年記念「日本民謡慈善公演」出演
 - 昭和五十六年 日本テレビ主催「日本民謡大賞日本一決定戦」西日本ブロック入賞
- ◆優勝大会での入賞歴
 - 師範・唄の部
 - 優勝二回（昭和五十年、五十三年）

幻の「亀治米」現代に蘇える

荒島小学校の体験学習に

生かされる

並河健蔵

前回この欄で、広田亀治によって開発された「亀治米」が、ブランド米の先駆として全国的に有名になった経緯を説明したが、今回はその「亀治米」が現代に見事に蘇って、さらに小学校の「ふるさと授業」の一環として大いに成果をあげることになったという、すばらしい物語を紹介することにす

その模様を逸早く、平成八年五月二十六日付の山陰中央新報が「水稲・亀治種古里で復活、サブタイトルで「荒島小学校児童が田植え」との見出しで、次のように報じている。

（前略）、戦前まで中国地方を中心に栽培されていた水稲「亀治種」を使い、安来市立荒島小学校の児童たちが、二十四日、田植への体験学習をした。（中略）復活を計画したのは元小学校校長の石賀敬一さんと、種もみを探し昨年、茨城県筑波市の農水省農業生物資源研究所から七グラム（二百十粒）を分けてもらった。これを近くの



平井守さんの指導で田植えをする児童たち（平成28年春）

農業・平井豊さんらが大切に育て、約三キロに増やして苗を作った。田植えをしたのは荒島小学校五年生の四十一人で、平井さんと次男の守さんから植え方を教わり田んぼに入った。平井さん所有の四アールで栽培し、秋には約二百キロを収穫する予定である。

石賀さんは「どんな味がするか楽しみ」とうれしそう。同小学校では給食で試食する計画で、苗を植えた生徒の一人は「社会科でコマ作りを学んだ。収穫が待遠しい」と目を輝かせていた。

ところでその成果はどうであったろうか。同年十二月二十六日発行の荒島小学校PTA機関紙「いしやま」第一一三号に、石賀さんが「幻の米、亀治米によせて」と題して、次のように報告しておられる。

「日本一農民銅像亀治さん」は「春は彼岸の亀治市」と郷土いろはかるたにうたわれた広田亀治銅像は、今日も荒島の空を見上げてりりしく立っている。

このたび五年生の皆さんが上荒島の平井豊氏の指導のもとに、米づくりの体験学習にチャレンジした。春の田植えから秋の稲刈りと土にまみれ、土のぬくもりを味わいながら幻の米「亀治米」を作った。勤労感謝の日の前日、体育館で全校児童と地域の皆さんで収穫祭の式典と亀治米の試食会を盛大に催した。（中略）このたびの収穫祭を契機に、子どもたちの目も亀治米に集中し、関心を高めた。

亀治銅像を改めて見学にいったり、どんな米かと聞きに來たりする子どももいた。また試食した亀治米の味

がともおいしかったの一言を耳にした。郷土の偉人・広田亀治翁の功績を改めて認識したようだ。さて田植えから収穫までの指導に当った平井守さんに昨年（平成二十八年）の実績を尋ねると、作付面積一・七アール（一・七畝）収穫量は玄米で六十一キロ、三十キロを給食に、他は公民館活動の人々が賞味した。平成八年から昨年までの二十一年間に、亀治米作り体験学習に参加した生徒数は、なんと七七二名に及んだという。そして次のような感想を寄せられた。



荒島小学校5年生たちが稲刈りに励む（平成28年秋）

亀治さんは何年もかけて研究努力をして亀治米を開発した。その米はとてもすばらしく長い間、主として西日本の各地で栽培され、多くの人に喜ばれた。生徒たちもその体験学習から今後いろいろな事に興味をもってほしい。やりたいたい事、達成したい事がある時、亀治さんのように勉強や努力をすれば、その願いが必ずかなえられるということをお教えている。

ふるさと授業のなかで、偉人やその実績を称えることは当然であるとしても、さらに荒島小学校のように、体験学習によって偉人を身近に感じ、尊敬するとは、極めて貴重であり、心から敬服するのである。

私と安来節



唄 准名人
増田登志子
(本部道場)

祖師の訓えを我らで研ぎ

永遠に伝えん 安来節

の合唱が始まる 門脇長市、高野静子両師匠の教室「安来芸能文化学院」に入門させて頂きましたのは、昭和五十二年の事でした。毎週土曜日午後八時から十時まで家元初代渡部お

糸さんの直弟子の誇りのもと、すでに数十年、お糸節を後世に伝える事を旨として無料の教室を開き、多くの先輩を育てておられました。常に十数名の生徒が、二間の部屋の壁を背に師匠を囲み、熱心な指導を受けました。私達親子四人が入会した時は、三名の先輩が師範挑戦の為、師範の唄を勉強中で、私達は唄を一日も早く先輩の様に唄いたいと思っ

たものです。その後、三味線を丸瀬一宇先生に習い、山陰民謡の踊りを今は亡き安来好子先生に教えて頂きました。師匠も先輩二人も他界されましたが、「本当の勉強は師範をとつてからですよ」と言っておられた師匠の言葉

今後は准名人昇格を契機に一層精進し、正しい安来節の伝承と普及振興、保存会の発展に微力ながら務めたいと思います。今後とも皆様の変わりぬご指導とご鞭撻をお願い申し上げます。

を今更ながら噛み締めている所でございませぬ。この度、准名人の免状を頂き、こんなにも多くの皆様にごこの日を待たせていたよ、「良かったね」と温かいお言葉、お祝いを頂きました事、誠に嬉しく、感無量でございます。長い間には色々な事がありました。常にそばで守ってくれた主人に心から感謝し、残された人生を「安来節保存会」の中で共に楽しんで行きたいと思っております。今後若い会員の皆さんがより活躍出来るように応援させて頂き共々自身も技量向上に努力致しますので、御指導、御鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

もっと個性を生かそう



絃 准名人
丸瀬千登世
(本部道場)

昭和五十六年、安来節保存会に入会し以来三十六年、これまでただがむしゃらに走って来たような気がしません。

この度、一月十日絃准名人に昇格させて頂きました。これもひとえに諸先生方のご指導と皆様のご支援のおかげだと深く感謝しています。私自身、まだまだ勉強しなければならぬ事、まだまだ山ある中で、その責任感で身が引き締まる思いが致します。

私達が安来節の世界にのめり込んだきっかけは、当時の安来市市民会館で観た安来節全国優勝大会でした。他民謡には無い独特のリズムと節回し、会場の迫力と気迫、三味線の音に感激し、まず三味線を習おうと丸瀬一宇先生の門をたたきました。少しやればある程度は出来るだろうと安易に考えていた私は、稽古が進むにつれその難しさを痛感しました。後で分かった事ですが安来節は全国の民謡の中でも三本の指に入る難しい民謡と分かりました。しかし時すでに遅し、引き返す事も出来ず以来今日まで続いています。私の目標、それは丸瀬先生のキレのある澄んだ三味線の音の作り方、バランスの取

れた音の繋がり、聞く人の心を引き付ける演奏技術です。しかし、それは練習すれば出来るものではなく、その人の持つ生まれた天性でもあります。でも逆に言えば、求め続ける目標があり常にそれを追い続ける事が進歩に繋がるのだと、自分に言い聞かせながら頑張っています。丸瀬先生の命を受け、平成十九年から始めた子供安来節教室「すずめの学校」は、安来節演芸館の全面的な協力のもとに早いもので十年目を迎えました。今、「すずめの学校」の生徒は二歳から大学二年生までの十三人、これまで二人の師範が誕生しました。生徒たちも学校の勉強と部活を両立させながらの安来節は大変ですが、指導者にとって生徒が師範になる事はこの上もない喜びです。皆さんも同じだと思えますが、生徒たちの指導はある程度自分を犠牲にしな

ながらの事であり確かに大変です。でも、後継者を育てる事は私たち保

存会の上位資格者の役目であり、仕事です。いつまで続くかわかりませんが生徒達のいる限り、続けようと思っております。

最近の安来節、以前と少し様変わりしているような気がします。唄にしても、もっと大らかでした。安来節には正しい安来節を保存継承する為の審査制度があり、沢山の決まり

事が要求されます。ただ、今はそれが少し強すぎて聴く人の立場が疎かになっていくような気がします。安来節も他の民謡と同じく聴いてもらって良かった悪かったかの世界です。唄い手の気持ちを聴いている人にどこまで伝える事が出来るかだと思えます。私は指導部の研修会で良く言う事があります。踊りでも唄でももっ

と自分の個性を生かすこと。だれもが同じ踊り、唄い方をしても観ている人、聴いている人は一つも面白くありません。安来節の保存と継承、普及、振興にはある面では相反する部分がありますが、大好きな安来節をもっと多くの人に聴いてもらい感激してもらえよう頑張りたいと思います。



鼓 准名人
唐木好美
(湖陵支部)

この度は、皆様方のお力添えを頂き、身に余る鼓准名人昇格という名誉に接し、心より御礼申し上げます。

私と安来節の出会いには昭和五十四年、町内の新年会で安来節の三味線を聞いた事が始まりでした。唄を唄える人がいなくて昨年惜しくも亡く

なられた我が師 周藤恭一先生の教室に行き、唄を小川幸雄准名人に教わる事になりました。三ヶ月で初めての審査を受け、二級を頂き、そこから少し面白くなり、順調に初段となりました。その頃湖陵支部には鼓をやる方が少なく、師匠や石飛孝支部長より貴方は鼓を習ってと言われ、鼓を習う事にしました。始めは全く半間が理解できず審査を受け、三級スタートでした。これでは駄目だと先生方のお世話を頂き、竹内松子先生に巡り会い本格的に習いました。おかげで二級、一級と全国大会での連続優勝をする事ができ、鼓にはまっていきました。初段の時より松子先生の紹介で原文男先生にお

世話になる事になり、その年、今日ではあり得ない初段での湖陵支部団体の部に鼓で出場する事となり、優勝チームの一員となりました。その夜、安来の町をにわかに歩かせて頂いた事が今でも忘れる事が出来ませぬ。その後も団体の部に連続出場させて頂き、鼓をやつて来て本当に良かったと思っております。この安来節で何よりの感謝は多くの方に巡り会えた事です。

今後、精進し、少しでも恩返しをしたく思っています。今後変わらぬご支援、ご指導頂きますようお願い致します。



唄 大師範
福田瑞枝
(本部道場)

安来節を始めたきっかけは、昭和五十六年頃だったと思います。地区の婦人会で、先輩の会員さんが「安来に居ながら安来節の一本も唄えないでは駄目だから、皆さん一緒に習いましょう」と提案され、「幸い上手な先生が同地区にいらっしやるので、頼んでみましょう」となり、唄

は金山久夫先生、絃は板持嘉夫先生に習い始めました。当時、私達の公民館は山陰本線と国道の間に建ち、特に夜九時頃になると駅の近くのので、十両編成の貨物列車が上下線交互に通る、先生のタクト振りを中断させ、通過を待ったのを懐かしく思い出します。五年程して絃の先生は越野幸吉先生に代わり、先生に勧められて「素人のご自慢」に出場して優勝し、保存会に入会しました。

平成元年に唄・二級に受かり、十二年に師範になりました。十六年には糸賀教室に入り、鼓を習い始め、二十二年に師範になりました。毎回練習に行くのが楽しく仕事や家事を片付けて向かいました。しかし、一

昨年突然に先生との別れがあり、当分の間、鼓を打つ事が出来ませんでした。鼓を打つ事が出来た事を守り、鼓を打ちながら一生懸命頑張ろうと思っています。

現在、私達の教室の先生方は唄・安達久美先生、絃・安達雅宏先生です。安来節を通じ、諸先輩の方々、教室の皆様のお陰で楽しく過ごす事が出来て喜んでます。まだまだ未熟な私ですが更なる努力を重ねて行く覚悟ですので、これからも御指導をどうぞよろしくお願い申し上げます。

私と父と安来節



高井芳雄
(神戸支部長)

私と安来節の出会いは、昭和二十二年五月三日です。この日、二代目出雲愛之助先生が襲名披露公演で大芦村(現・松江市島根町大芦)に来られ、当時青年団で安来節に取り組んでいた父正義は出産予定日間近の母を伴って会場の小学校に出掛け

たそうです。先生の唄に感動した父は三日後に生まれた長男に、先生の御本名の一字を勝手に戴き「芳雄」と名付けました。

してると、「関西にも支部があるから」と入会を勧められ、当時の川島宍道支部長を通じて、当時の関西支部長の梅若朝啄先生を、紹介頂き、入会しました。私が入会した事を知ると仕事の関係で好きな安来節から長らく遠ざかっていた父も、当時島根町内で開かれていた濱崎正人先生の教室へお世話になり、松江支部に入会して三味線を再開しました。それからの盆、正月には必ず帰省して親子水入らずでの練習と安来節談義が恒例となりました。父は八年前に八十七歳の天寿を全うしましたが、安来節が老後の生きがいとなり、年に数回しか会えない父子の大切な絆でもありました。



小林敏子
(山口支部)

三十五歳の時に主人が亡くなり、当時勤めていた会計事務所の先生に「四十歳までに何か趣味を見つけて下さい」と言われました。以前から三味線をやってみたいとの思いがあり、知人に話した所、安来節の教室を紹介されました。三味線というものを

も始めました。人前で唄った事のない当時の私にとってはこれもまた、音を上げそうでした。入会して十年余りの時、当時の支部が解散し、三、四年の空白時期がありました。現支部の先生方から再入会の誘いを受け、鼓と銭太鼓を習い始めました。重ねた年数と有資格が比例しませんが、年に数回は慰問、催し物等に出演される仲間に加えてもらえる様になり、続けて来て良かったと実感しております。同じ趣味を持つ仲間と関わる事が出来る喜びを感じ入っております。体力、気力が続くまで頑張りたいと思っております。

安来節に出逢えた事が人生の生き様の中の収穫です。



菅原輝雄
(東北支部)

早いもので安来節に出会ってから今年六年目になります。河北新聞の記事で「河北TBCカルチャーセンター・安来節どじょう揃い踊り」の講座が目にとまりました。

還暦を迎えた私は、趣味として身体を動かす健康的な運動がないものかと考えていた瞬間の出来事で、私はこれだと思つてすぐに入会の手続きを取った次第です。習い始めて先輩達の踊っている姿を見ると、自分も簡単に踊れると思いつつも全然駄目で、数ヶ月が過ぎた頃から唄に合

徒の皆さんを明るく元気な雰囲気でも爆笑しながら稽古に励んでいます。しかしながら顔の表情や仕草、間の取り方等、きめ細かな所が非常に難しいですが、だからこそやりがいと生きがいがあります。私は未熟ですが踊りが好きなので、今まで続ける事が出来たと思うこの頃です。会員も毎年増え、平成二十七年十一月五日に安来節保存会東北支部が設立されました。清野先生の指導で先輩方二人が師範の資格を持っています。また今年も数人が師範挑戦する予定です。自分も勉強の為、地元の敬老会や各種団体などから依頼が入りますと積極的にボランティア活動に参加させて頂いています。これからも心・技・体の三拍子の揃いを磨き上げ、各地に安来節を広めるため、稽古に励み師範を目標に夢を追い求めて行きたいと思えます。また、各教室の会員の皆様方との交流会が何よりの楽しみでもあります。

私と安来節との出会い



小南シゲコ
(和歌山支部)

私は、小・中学生の頃から民謡や浪曲が好きな変わった子供でした。早い時期に結婚し、仕事をしながら三人の子供を育て、月日が経ち、やっと子育ても仕事も一段落ついた今、ボケない為に何か趣味を持つとうと思つていた時、老人会の旅行に出

かけ、民謡をやっているというお姉さんに出会いました。初めて会った方でしたが、思い切つて先生の紹介をお願いすると、気持ち良く先生をご紹介して頂き、民謡と三味線を習い始めて三年程になります。お姉さんとも親しくお話が出来る様になり、「安来節もあるよ」と連れて行ってもらい、安来節も習い始めました。先生は安来節全国大会で全国一にもなった良い先生で教えて下さる事も良く分かりますが、素唄が難しく苦勞しております。しおりを見るのと歌詞がとても良く、段位を取った方の唄を聞くとほれぼれします。私も頑張つて段位を取れる位まで一生懸命勉強して人前で唄える様になりたいと思えます。先生の一歩出来るの悪い生徒だと思えますが、ゆつくりでもいいので自分の出来る分だけ一歩一歩続けたいです。

支部情報

支部紹介



山本英三
(広島東支部長)

現在会員数は六十五名(少年の部五名)、教室は五教室です。広島東支部は銭太鼓が盛んで四十名の会員が励んでいます。全国優勝大会の種目となった年より昨年まで連続出場を果たしています。残念ながら上位入賞には届きませんが、練習に励む会員の熱意には関心します。わずかではあります。会員が増えているのは支部の皆さんが銭太鼓を動機付けに勧誘に努めているお陰です。祭りや老人ホームでのボランティア活動等、積極的に取り組んでおります。毎年広島で行われます「天皇杯全

国男子駅伝前夜祭」においてNHK広島放送局前の郷土芸能ステージで島根県応援団として安来節を披露しております。広島東支部という支部名の由来は、設立時の保存会への「支部設置許可申請書」の発起人をはじめ支部長・副支部長・事務局長の四名全員が広島市の東、安芸郡熊野町の先輩方なのです。設立は昭和四十九年十二月十五日、四十二年のあゆみがあります。私は平成元年に転勤により山口支部より転籍しました。当時は娘二人も会員、慣れない環境でしたが、皆さん親切な人ばかり、なんなく仲間入りさせて頂きました。私は十代目の支部長となります。先人の方々の支部発展へのご努力、ご指導下さった先生方に深く感謝し、会員の皆さんがより明るく楽しく、やる気あふれる支部を目指したいと思います。

総会並びに懇親会開催



坂口美弥子
(米子支部長)

一九四八年米子支部創設以来、初の女性支部長を拝命し、微力ながら一年を迎える事が出来ました。会員五十名を率いての昨年度は、全員Tシャツを新調し、今年度は執行部の連携と会員のご協力によりまして横断幕を作成する等、活気あふれる支部へと会員一丸となつての活動が出来ました事、心より感謝申し上げます。

一つになった様な会場でした。牛の売買をする博労氏がセリ市に高値で売れる事を願ひ、また牛との悲しい別れをストリーに唄ひ、名牛、千屋牛と共に栄えた民謡「千屋の牛追い唄」に寸劇を添えて、会員の皆さんが笑い涙で終始穏やかな一時を過ごされ、何時もの唄い初め会に一時間延長しての懇親会は大盛況にて終了する事となりました。終わりになりましたが、少しでも保存会会員減少に歯止めを掛けられる様に今後も微力ではありますが、会員拡大に頑張つて行きたいと思っております。皆様方の変わらぬご支援、ご鞭撻を受け賜わります様、心からお願ひ申し上げます。



◆会員の声「一ナー」◆

「もっと知りたい …高山雅市さんのこと②」



審査員
渡部 孝夫
(本部道場)

◆巡業

「平尾興業と一緒に入ったのは出雲お糸と三味線の荒金義雄さんなど数人でしたが今じゃ私一人ですよ」

平尾興業社というのは全国の旅回り一座で、暑いときは北国、寒いときは南国とあっちへ行ったりこっちへ行ったりとただドサ回りの芸人は苦労があったらしい。せんべい布団にくるまって男も女もざご寝。「自分から飛び出したもんだから弱音は吐けないし」

「何がつらいと言って戦前は芸人といえば下賤なものと思われていたことだったけど、でも私は暢気なものですからあまり気にしていませんでしたけど」と辛いと言いつつ、雅市さん「習う師匠がいらないから節回しなんか見様見真似で稽古して自分一人が頼り。出来がいいか悪いかはお客の拍手で確かめていたらしい。」

しかし発声法が本格的ではなかったと本人が言っているとおりの無理をしたのでしよう二十五歳のとき、全蒸声が出なくなつた。声が出ない安来節なんか雇ってくれる座元がいらないから、ここが一番大いに悩んだところ。

信念のあるなしの人はここから選択が違ふようです。一生懸命悩んで声が出なければ出さなくてもよい芸は何かといえは鳴り物。これだつて簡単なものではないはず。まして巡業中ですから

落ち着いて稽古をする余裕はないはずですね。ですから迷惑をかけない覚悟で並外れた稽古をして一座に居残つた。

そして「元來私の顔作りが二枚目より三枚目にできているから。」と男踊りもこの時から始めています。

◆まじめな一面

昭和初年、初代出雲愛之助さんの媒酌で保子さんとゴールイン。これも愛之助さんの仕事で加茂中へ行つたそのとき人生大事なことすべて単刀直入、初めてあつた保子さん。「同じ芸で一緒になつたんだからさぞかし熱烈だったんでしょ」と人はいうが、トテモ、トテモ。半年ほどの付き合いでした」とスピード結婚。

さて、私と雅市夫人名人高山保子さんとの出会いはほかにあります。二代目渡部音吉師匠が都合のつかないとき代打で玉造のお座敷へはちよくちよく出かけたものですが、保子さんは帰りの車の中で一仕事終えた安心からでしょうか、「お父さんは出がけに（ええ鼓の音がせないけんがの）とか、（今日は飯食いに行くか）とか言いましたよ」こんな話からも二人の仲が大変良かったことがうかがわれます。

雅市さんは当時、その頃の観光ブームで引つ張りだしたので、そんな機会に県、市の観光行政に対しても批判するなど意見してシンは強かつたようです。だが「酒はダメですが今春から飼いはじめたスピッツの毎朝散歩とカメラが趣味でした」

（昭和三十三年十月二十四日付中国新聞から）
◆芸に込めた情熱
声の出ないとき人知れず悩んで考え付いたのが安来節の鳴り物に鼓を入れることと男踊りです。

当時の男踊りは「ヨゴレ」といって顔は墨で書き、立ちしよんべんの振りはするし、手鼻をかむなど所作でお客の笑いを取っていました。「お客はゲラゲラ笑うがこんな下品な笑いは長続きしないと

思い一生懸命考えました」
これじゃいけないと一人で考え込んでいる。こんなとき巡業中見たのが青森県盛岡市の民謡踊りと阿波踊りの男踊り、これが強く印象に残り、何がこんなにまで大衆に受け込み長続きしているか。それと曾我廼家五郎（松竹新喜劇、喜劇役者）の所作をヒントにして安来節のテンポに合わせて男踊りを考案した。

芸を求め意欲は並大抵のものではなく、昭和十年ごろ夫婦で吉本興業に入り轟一蝶、美代子さんコンビから漫才を習っている。保子さんに言わせれば「生活のためですよ」とさりげなく言う。雅市さんは、「私の漫才は」まあ大したもんじゃなかつたですがね。一蝶さんつてのはいい人で昨年死去するとき形見にと愛用の鼓を送つてくれました。ずいぶん昔の付き合い

大阪では毎晩のように寄席に通つて落語を勉強している。「噺家の顔の表情がなんともよろしく人情百般を扇子一本で表現している」また「ずうつと後ろの席からでもその表情がわかる。エライもんですな。これを何とか男踊りに取り入れたいと思ひましてね、私の踊りに表情があるとすればそれは落語の影響です」



花江朝助師匠
音吉幸雄

「それから鼻の頭に一文銭をつけるあれも何とかなという落語家がやっていたんです」
（昭和三十三年一月九日付島根新聞）
◆笑いのコツ
「お客さんの眼つてのは正直なもんです。こちらが勉強不足だと拍手がさみしい。この辺でドツとくるはずがこなくて、はてなと思つて気を抜いたらドツと来る。」
「新しい試みをするときなんか舞台慣れしたこの年になつてもドキドキする」

よほど稽古してお客の間合いを見てニコツと笑う、そのタイミングはちよつとやそつとで出来る技ではありません。歩く姿でもただテンポに会うだけでは滑稽

さが出ません。三味線にもあるように「ま」をどのようにとるかには百戦錬磨を重ねた味でしょうね。

◆男踊りの地位向上

高山雅市さんがすごいところは安来節がアラエツササーの流行であつたことを一般大衆の芸に仕上げたことでしょう。戦前戦後とも安来節芸人の評価が低かつたことを昭和三十年十一月勤労感謝の日郷土芸能の発展に功績があつたとして島根県知事から表彰を受けました。この表彰は安来節と男踊りの地位を大いに高めることになりました。



平成29年唄い初め会支部競演結果

- | | |
|----------|----------|
| 安来市長賞 | 道場支部 |
| 安来市議会議長賞 | 支支支部 |
| 安来市観光協会賞 | 支支支部 |
| 安来商工会議所賞 | 支支支部 |
| BSS山陰放送賞 | 支支支部 |
| 足立美術館賞 | 支支支部 |
| 家納喜賞 | 支支支部 |
| 安来節演芸館賞 | 支支支部 |
| | 本宮関加鳥斐益平 |

感動を呼ぶ 音色と 響き 丹念な加工 調整 仕上げ

(有)仁木三味線

製造・販売/修理 三味線・鼈甲撥・尺八・太鼓

〒240-0022 神奈川県横浜市保土ヶ谷区西久保町197-1
TEL 045(713)4319 FAX 045(741)4796

HP <http://www.syamisen.com/>

安来節保存会創立100周年記念
安来市無形民俗文化財指定記念

安来節・基礎テキスト

ビッグ付録
「安来節あんこ特集」

絶賛発売中!

唄われて100年の魅力!
安来節保存会200年へのテーマ

価格 1,000円

出雲街道民謡交流会編集発行
090-2809-1233(渡部孝夫)

